

鳥羽離宮跡調査概要

昭和55年度

京都市埋蔵文化財調査センター
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

いうまでもなく京都市は、わが国随一といわれる歴史の堆積地であり、そこに埋没している遺跡、遺構、遺物は質、量ともに他の比肩を許さないものであります。

平安の開都以来、千有余年、王城の地としてわが国文化の創出、集散を重ねてきた本市の地下土層には、京都の歴史、日本の歴史が凝縮され、眠っております。さらに近年は、平安の開都以前、いわゆる先史時代の文化遺跡までも、その存在が確かめられ、いよいよ埋蔵文化財包蔵地としての評価を高めつつあります。

しかしながら、京都市はまた、古代から近代にいたるまで、王城の地として途切れることなく生きつづけ、今日もなお150万の大都会として、明日へ向って発展をつづけているという他に類例をみない特異な街でもあります。このことは、保存、保護すべき埋蔵文化財が、常に大都市の活動の前に、破壊、滅失の危機にさらされていることにほかなりません。この現状に対応するには、可能な限り、これら歴史の物証を破壊、滅失から護り、光をあて、その意味するところを解明し、位置づけをして真の歴史の構築に役立たせること、とあわせて先人の貴重な遺産として後代に継ぐのが、われわれに課せられた責務であると考えます。

このため、10数年来、発掘調査による記録保存を中心に、微力を注いできましたが、本報告書も、昭和55年度分として、国の補助を受け、京都市埋蔵文化財研究所に、全面的に調査を委ねて得られた成果であります。これをもって、学術研究なり、文化財保護の一助にでもなれば、身に過ぎた喜びであります。

なお、調査にたずさわっていただいた京都市埋蔵文化財研究所ならびに、ご協力いただいた調査員、事業者の方々をはじめ、関係各位のご支援、ご協力に、心から謝意を表します。

昭和56年3月31日

京都市埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、鳥羽離宮跡昭55年度文化庁国庫補助事業における発掘調査の概要である。
- 2 発掘調査は、京都市埋蔵文化財調査センターが財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は9ヶ所実施した。発掘調査次数は、第57次・第58次・第59次・第60次・第63次・第64次・第65次・第66次・第67次である。
- 4 本書の執筆は第57次・63次・64次・66次・67次調査を前田義明が、第58次・59次・60次・65次調査を鈴木久男が分担した。
- 5 写真は遺跡の一部を除き牛嶋茂が担当した。
- 6 付編の原稿は京都大学理学部教授池田次郎氏が執筆していただいた。

目 次

第57次発掘調査	1	III 遺物	16
I 調査経過	1	IV まとめ	16
II 遺構	2	第63次発掘調査	17
III 遺物	5	I 調査経過	17
IV まとめ	5	II 遺構・遺物	17
第58次発掘調査	6	III まとめ	18
I 調査経過	6	第64次発掘調査	19
II 遺構	7	I 調査経過	19
III 遺物	7	II 遺構	20
IV まとめ	8	III 遺物	22
第59次発掘調査	9	IV まとめ	23
I 調査経過	9	第65次発掘調査	24
II 遺構	9	I 調査経過	24
III 遺物	12	II 遺構	24
IV まとめ	14	III 遺物	26
第60次発掘調査	15	IV まとめ	28
I 調査経過	15	第66次発掘調査	29
II 遺構	15	調査概要	29

第67次発掘調査	30	IV まとめ	33
I 調査経過	30	むすび	34
II 遺構	30	付編 第57次調査SK2出土中世	
III 遺物	31	人骨について	35

図 版 目 次

図版一	調査位置図
図版二	第57次調査 遺構実測図
図版三	第58次調査 遺構実測図
図版四	第59次調査 遺構実測図
図版五	第60次調査 遺構実測図
図版六	第65次調査 遺構実測図
図版七	第65次調査 遺構実測図
図版八	第65次調査 地盤実測図
図版九	第43・45・65次調査全域実測図
図版十	第67次調査 調査位置図
図版十一	遺物第59次調査 軒瓦拓影・実測図
図版十二	遺物第65次調査 軒瓦拓影・実測図
図版十三	遺物第43次調査 軒九瓦拓影・実測図
図版十四	遺物第43次調査 軒平瓦拓影・実測図
図版十五	遺物第45次調査 軒瓦拓影・実測図
図版十六	遺物第59次調査 SD5出土遺物
図版十七	第57次調査 1. 全景(北より) 2. SK2(南より)
図版十八	第57次調査 1. SK3(北より) 2. SK7(東より)
図版十九	第57次調査 1. SK8(西より) 2. 数珠玉
図版二十	第58次調査 全景(北西より)
図版二十一	第58次調査 1. 全景(北西より) 2. SX2(北西より)
図版二十二	第59次調査 1. 全景(北東より) 2. SX1江戸時代(北東より)
図版二十三	第59次調査 1. SE1・SE2全景(北東より) 2. SE1竹筒接合部(東より)

- 図版_{三〇} 第59次調査 1. 竹筒接合部(東より) 2. SD5全景(北東より)
- 図版_{三一} 第60次調査 1. 全景(南より) 2. 建物跡(南より)
- 図版_{三二} 第59次調査 1. 石敷遺構(南より) 2. 石敷遺構(南東より)
- 図版_{三七} 第63次調査 1. 全景(北より) 2. 北壁断面
- 図版_{三八} 第64次調査 1. 全景(北より) 2. 羽釜出土状況
- 図版_{三九} 第64次調査 1. SE1(東より) 2. SE2(西より)
- 図版_{四〇} 第65次調査 調査地航空写真(南西より)
- 図版_{四一} 第65次調査 1. 建物全景(東より) 2. SB2全景(東より)
- 図版_{四二} 第65次調査 1. SB1・SD1全景(北より) 2. SD1軒瓦出土状況(南より)
- 図版_{四三} 第65次調査 1. SB1基壇内抜き穴(北東より) 2. SX1抜き取り穴(北より)
- 図版_{四四} 第65次調査 1. 礎石、凝灰岩(東より) 2. 礎石、花崗岩(北より)
- 図版_{四五} 第65次調査 1. 断割り状況(東より) 2. 断割り状況(北より)
- 図版_{四六} 第65次調査 1. 地業石積み状況(北西より) 2. 地業石積み状況(東より)
- 図版_{四七} 第65次調査 1. 南壁断面 2. 断割り断面
- 図版_{四八} 第66次調査 1. 北トレンチ全景(北より) 2. 西壁断面
- 図版_{四九} 第67次調査 1. 全景(北より) 2. 汀線(北東より)
- 図版_{五〇} 遺物第59次調査 人形(4・5) 錐(6) 将棋の駒(2) 舟形木製品(3) 刀(7)
- 図版_{五一} 遺物第65次調査 軒丸瓦(9・10・13) 軒平瓦(15) 鬼瓦
- 図版_{五二} 遺物第43次調査 軒丸瓦(17・18・20・21・22・24)
- 図版_{五三} 遺物第59次・60次調査 瓦器(9・12・13) 青磁(14・15) 水滴(第60次出土)

挿 図 目 次

図 1	第57次調査位置図……………	1	図16	第60次調査位置図……………	15
図 2	第57次西壁断面図……………	2	図17	第60次西壁断面図……………	16
図 3	第57次 S K 2 実測図……………	2	図18	第60次出土水漬、玉実測図……………	16
図 4	第57次 S K 3 実測図……………	3	図19	第63次北壁断面図……………	17
図 5	第57次 S K 6 実測図……………	3	図20	第63次調査図……………	18
図 6	第57次 S K 7 実測図……………	4	図21	第64次調査位置図……………	19
図 7	第57次 S K 8 実測図……………	4	図22	第64次東壁断面図……………	20
図 8	第58次調査位置図……………	6	図23	第64次調査図(南トレンチ)……………	21
図 9	第58次南壁断面図……………	7	図24	第64次出土石剣・提瓶実測図……………	22
図10	東殿付近航空写真(昭和52年撮影)	8	図25	第65次北壁断面図……………	25
図11	第59次調査位置図……………	9	図26	第66次調査位置図……………	29
図12	第59次北壁断面図……………	10	図27	第67次西壁断面図……………	30
図13	第59次調査図(江戸時代)……………	11	図28	第67次調査図……………	31
図14	第59次出土遺物実測図……………	13	図29	第67次出土遺物実測図……………	32
図15	第59次 S D 5 南壁断面写真……………	14	図30	東殿・田中殿航空写真……………	33

第57次発掘調査

I. 調査経過

今回の調査は、民家の新築工事に先立って事前に行なった発掘調査である。調査地は白河天皇陵の北方約60mに位置し、推定の鳥羽離宮東殿の西端部にあたる。近辺の推定東殿における調査は、第12次・第20次・第21次・第24次・第55次・第56次等が実施されており、鳥羽離宮の発掘が、大規模に行なわれているところである。第9次・第10次調査の舟入りと称される石列群、その北方の白河天皇陵の東側で建物跡、多量の土器を含む土坑等、成果をあげている。

昨年度、第55次調査と第56次調査を調査地の南側道路で実施し、鳥羽離宮期の庭園跡を検出している。径2mほどの庭石を配置し、径5～10cmの小石を肩部に敷きつめる汀線が東西に広がっていた。今回は、その北に接するところで、南側と同様に庭園あるいは建物跡が予想された。

当地は、これまで畑地として利用されていたところであり、南側の水田より比高差が50cmほどで一段高くなっている。調査地と東隣の民家との間に排水溝が流れ、縦に長い調査区となった。調査区は、南北の区画整理道路に合わせて設定した。

調査の結果、鳥羽離宮期の遺構は検出されず、中世後期の墓跡5基が発見された。墓は上部が削平を受けていたが、人骨と副葬品が良好な状態で遺存していた。

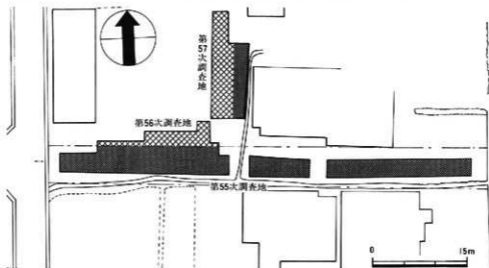


図1 第57次調査位置図

II. 遺構

基本層序は、耕土・床土・茶褐色泥砂・暗褐色泥砂・暗褐色砂泥・茶灰色砂層の順で続き、地山の茶褐色砂礫となる。発見された遺構は、墓5基（SK2・3・6・7・8）と溝3条（SD1・2・3）である。墓は、人骨を伴うものであるが、この他に、埋葬施設及び人骨はないが、同規模の土坑（SK4・5）も見つかっている。溝は、東西方向（SD1・2）と南北方向（SD3）に流れるものに分かれる。SD1は、深さが30cmで、南肩に五輪塔と石塔を用いて石垣を積んでいる。北肩は、調査区外に出るため、幅は不明である。埋土は暗灰色泥土である。SD2は、幅が230cm、深さが50cmで、埋土は灰褐色砂泥である。

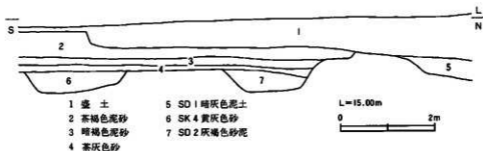


図2 第57次西壁断面図

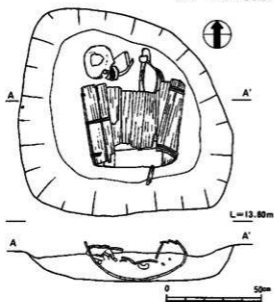


図3 第57次SK2実測図

SK2 トレンチの中央付近で検出され、SD3に切られている。掘形は110cm×110cmの不定形で、検出時の深さは約20cmである。今回の調査で、最も人骨の残存状態の良いものである。棺は桶を用いているが、横に倒れた状態で出土した。桶は竹製のタガが上・中・下に3本回っており、復元すると直径40cm、高さ40cmになり、非常に小さいものである。埋葬時の姿勢は、頭部が北にあり、両手両足を折り曲げ、上半身は、桶より外にはみ出している。桶の蓋は見つかっていない。桶が小さいために、下半身のみ桶に納め、横に

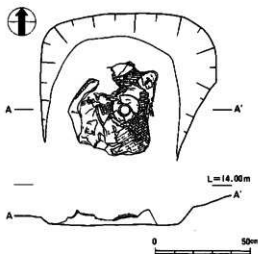


図4 第57次SK 3実測図

大ききである。側面は、8cmの高さが残っている。残存状態が不良なため、詳細は明らかでないが、籠には上蓋がついていると思われる。籠は、綾織りで織られている。人骨は、足と腕の一部しか残っておらず、頭部は北にあると思われる。副葬品は、漆器の椀と数珠玉が出土した。漆器の椀は、人骨の上に、逆にかぶせたような状態である。数珠玉は、籠

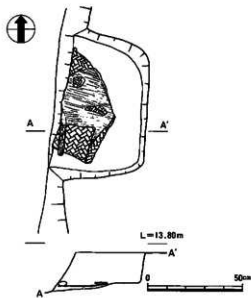


図5 第57次SK 6実測図

して埋葬したものであろう。桶は転用品と思われる。副葬品としては、多数の数珠玉がある。数珠は、長いものが腕を一周するように、連なって出土している。

SK 3 SK 2の東側1mほどのところに位置する。南側がやや削平されているが、掘形は、100cm×100cmで隅丸の正方形を呈し、深さ10cmを測る。埋葬施設は、竹製の籠を使用している。土圧によって押しつぶされているため籠の形は不明であるが、45cm×45cmの

の北隅に散乱して見つかっている。

SK 6 SK 2の南側で見つかり、SD 3によって西半分を破壊されている。掘形は方形と思われ、大きさは南北が80cmで、東西が50cm残っている。深さは20cmである。棺はSK 3と同様に、綾織りの竹製の籠を用いている。籠は縦が55cmで、側面の高さが7cmである。上蓋の上に、コモのようなものが被せてある。人骨は残りが悪く、埋葬状態は不明である。副葬品としては、銅銭が出土しているが、表面の腐蝕が進んでおり文字は読めない。

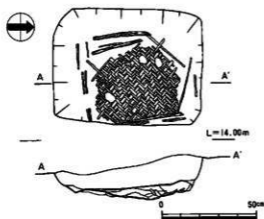


図6 第57次SK7実測図

つかり、北に向けて埋葬されたものである。他の部分の残りが悪く、埋葬時の姿勢は不明である。副葬品としては、漆器の椀・銅銭・数珠玉が中に納められている。銅銭は腐蝕が

SK 7 SD 2の南側で見つかり、地山の茶褐色砂礫層を振り込んで作られている。掘形は南北80cm、東西60cmの長方形を呈し、深さは20cmを測る。棺はSK 3・SK 6と同様に竹の籠を使用している。籠は、60cm×50cmの大きさがあり、側面は不明であるが、人骨をはさんでいるので、上蓋がついていたものであろう。籠の周囲には、やや太めの竹がまわっており、縁の部分と思われる。人骨は、頭骨が北端で見

SK 8 中央部東端で検出され、SK 3の南側にあたる。掘形は南北115cm、東西110cmの大きさを、隅丸方形を呈している。検出時の深さは35cmを測る。棺は、今回検出された土塚墓の中で、唯一木の箱を用いている。底には厚い板を置き、その上に箱をのせ、板で蓋したものである。底板の裏側には、縄の痕跡が縦横に認められ、棺をしばったものと考えられる。棺の大きさは70cm×45cm、側板の高さが20cm残っている。側板は、東側しか認められない。底板と上板は張り付き、その間に人骨がはさまれ、平たくつぶれた状態である。人骨は、頭部が北にあり、顔は西を向き、手足は折り曲げられて

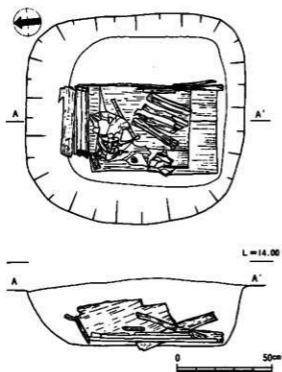


図7 第57次SK8実測図

いたと思われる。

III. 遺物

出土遺物は瓦・土師器・陶器・磁器・羽釜・スリ鉢・漆器・数珠玉・銅銭・五輪塔等がある。大半が近世以後の包含層より出土しているが、墓跡の副葬品として漆器の椀・数珠玉・銅銭が検出されている。数珠玉はSK2・SK3・SK7より出土し、大小あるが、木製のもの種子に穴を開けたものと2種類ある。木製はソロバン玉状に中央がふくらむもの(高さ1.3cm径0.9cm)、丸底フラスコ状をしたもの(高さ1.0cm径0.6cm)、平たいもの(径1.2cm厚さ0.3cm、径0.8cm厚さ0.3cm、径0.7cm厚さ0.3cm、径1.3cm厚さ0.7cm)に分けられる。数珠玉はSK2より最も多く出土し、種子はSK3にのみ認められた。漆器の椀は、SK3・SK7の籠製棺内より1個体ずつ出土しているが、いずれも押しつぶされて、原形をとどめていない。木質の部分は腐蝕し、漆だけが残っていた。黒漆を塗り、その上に朱漆で紅葉の文様を描いたものである。銅銭はSK6とSK7に副葬されていたが、腐蝕が進んでおり、文字は読めない。一石五輪塔が、SD1の南側に2個体出土したが、それには銘が彫り込められていた。風化が激しく明確ではないが、いずれも「慶長」と読める。

IV. まとめ

調査地の南側で、昨年度調査を実施し、鳥羽離宮の庭園跡が検出されている。今回も、それらと関連性のある遺構が期待されたが、鳥羽離宮期の遺構・遺物は認められず、中世後期の墓跡が検出された。墓跡は5基見つかったが、狭い面積で検出されており、周囲にも広がっていると考えられる。今回見つかった墓跡は、保存状態が比較的良好で、棺桶・副葬品が腐らずに残されていて、これまで明確でない中世の埋葬の一例が判明された。時期差はあると思われるが、墓の切り合いは認められず、適当な間隔をもって作られているので、それほどの年代幅は無いであろう。棺は桶・籠・木箱の3種類に分けられるが、いずれも棺専用には作られたものではなく、日用品の転用と思われるものばかりである。副葬品は、籠棺においては、銅銭・漆器椀がセットとして納められている。桶の場合は、数珠玉が多数出土した。人骨は、SK2以外断片しか残っておらず、性別・年齢は判定しがたい。楕形の形・大きさはいずれも似かよって、東西が60-100cm、南北80-120cmの方形を呈している。SK4とSK5からは埋葬施設・人骨は検出されなかったが、規模が同様なため墓の可能性が高い。

第58次発掘調査

I. 調査経過

今回の調査は、現状変更に先だって実施した事前発掘調査である。当調査は、鳥羽天皇陵（安楽寿院陵）の南約10m、近衛天皇陵（安楽寿院南陵）西約5mの所に位置する水田地で行なった。付近には冠石や北向不動院などもある。当該地周辺の発掘調査は、過去数次にわたって実施されており、東殿関係の重要な遺構が多数検出されている。その主なものについて二、三あげてみると、第9次・10次調査では舟入り遺構ならびに庭石、第11次調査時には池の汀線や庭石が発見されている。また、つい最近、近衛天皇陵の南で行なった第44次調査では、緑泥片岩などを用いた庭園跡や石列が検出されている。以上のように、この地域では、東殿に造営された一連の庭園遺構が数多く発見されている。この調査地は東殿範囲内の南東に位置することから、これらの庭園遺構が発見される可能性が十分に考えられた。



図8 第58次調査位置図

II. 遺構

調査の結果、検出した主な遺構は、石敷遺構や南北方向に延びる溝状遺構などである。調査地の基本層序は、耕作土下に厚さ約15cmの淡茶褐色泥土(床土)、その下に厚さ約30cmの淡灰色泥土が認められた。更にその下に、厚さ約30cmの淡褐色粘土、茶灰色粘土(厚さ30cm)が堆積していた。これらの層からは数片の染付破片が出土している。茶灰色粘土の下は、厚さ20cm前後の黄褐色泥土があり、その下には、更に青灰色粘土が約30cm検出され、地山の暗青灰色泥土となる。以下、検出された遺構について述べる。

S X 1 調査地中央部の北から南へ徐々に下がるゆるやかな面に認められた遺構で、拳大の河原石をあらく敷きつめたものである。敷きつめられた礎は、調査地付近には認められず、周辺部より持ち込まれたものであると考えられる。

S X 2 調査地東側に認められた溝状遺構である。幅約2.3m、深さ約30cmを測る。埋土には、土器や瓦の他に、木葉や木枝、種子などが多く含まれていた。西側肩口には礎や瓦が点々と認められた。同じく、西側肩口には樹木の株も認められた。この樹木の株は、層位関係よりこの遺構面に対応するものと考えられる。

III. 遺物

遺物の大半は、S X 2の底部や西側肩口部より出土し、土器・瓦・木製品・自然遺物などがある。量は瓦が最も多く、土器類は極めて少量であった。土器は、土師器皿・瓦器埴山茶碗などがある。土師器はすべて皿類で、口縁部を軽く二段に横ナテを施すものであった。瓦器は、体部内外面にやや細いミガキを施した埴である。底部内面はあらい螺旋状のミガキが認められる。高台は低い断面三角形である。瓦は、丸瓦・平瓦がほとんどであり、軒瓦は小片のものばかりである。これらの瓦はいずれも焼成良好である。

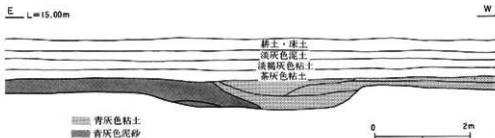


図9 第58次南壁断面図

IV. まとめ

当調査地では、鳥羽離宮の東殿に造営された主要な建物遺構などは検出されなかった。しかし、主要建物の周辺部の一端を明らかにすることができた。たとえば、調査区南側では庭園遺構が多数検出されているにもかかわらず、当調査地では庭園遺構や建物遺構は全く発見できなかった。また、日常雑器として使用される土器の出土が極めて少ない。これらのことからすれば、当調査地は、建物と庭園とを結ぶ重要な空地であったとも考えることができる。



図10 東殿付近航空写真(昭和52年撮影)

第59次発掘調査

I. 調査経過

今回の調査は、近衛天皇陵（安楽寿院南陵）南東隅に隣接する水田地で行なった。現在までにこの付近で実施した発掘調査は、第10次・16次・32次・40次・44次調査などである。これらの中で、今回の調査地南側で行なった第44次調査では、中世の建物跡や井戸、土坑などが発見されている。また、当調査地北側の第32次調査で、南北方向に伸びる幅6mの溝を検出している。そのため、この溝が当該地にまで及んでいることがほぼ確実であると推定された。

II. 遺構

検出した主な遺構は、建物跡・井戸・土坑などがある。これらを時期別に分けると、江戸時代に属するものには、建物跡・井戸・溝・池跡などがある。鎌倉時代～室町時代のものには、建物跡・井戸・溝がある。平安時代（鳥羽離宮期）の遺構には、溝がある。調査地の基本層序は、耕作土下に灰色泥土が認められる。この灰色泥土は、西から東に向かって徐々に厚くなる。その下には、灰色泥砂が堆積していた。同層はSD5を境にして東側だけに検出できた。更にその下には、茶褐色あるいは青灰色の砂礫の自然堆積層が調査地全面に認められた。更に調査を進めた結果、この層から平安時代前期の土師器・須恵器・瓦・三彩小壺などが出土した。ゆえに、この砂礫層は、鳥羽離宮期以前に堆積したものと考えられる。

以下、検出した遺構を新しいものから順に述べる。



図11 第59次調査位置図

SX1 板や丸太を用いて土留めし、その上に拳大から頭大の石を積みあげて護岸とした池状の遺構である。遺構の中央部には、縦80cm、横50cmの木箱が据え付けられていた。木箱は底部が抜かれていた。埋土には、木葉や木枝などの有機物が厚く堆積していた。また、西側には塀に葺かれていたと考えられる瓦が落ち込んだ状態で検出された。

SE1 上部は棧瓦風の瓦板を積みあげ、下部は縦板を桶状に組み合わせて井筒としたものである。井筒の西側に直径5～6cmの穴が開けられ、そこに竹筒が差し込まれていた。この竹筒はSD1の底部を通りぬけ、SE2へ連絡されていた。

SE2 直径70cm、深さ50cmの桶を木枠として用いたもので、底部近くにSE1同様に、直径5～6cmの穴が設けられていた。

SD1 南北方向に伸びる素掘りの溝で、西側肩口には杭が打ち込まれていた。

SB1 調査地の南東部に検出され、河原石を礎石として用いていた。規模、間取りについては、今回の調査では明らかにすることはできなかった。

SE3 SB1の整地層下に検出され、掘形は一辺約1.5m前後で方形に掘られていた。上部は江戸時代の整地時に、ほとんど破壊されていたが、最下部だけが一部遺存していた。検出状況より推定して、上部は縦板を数枚重ね、それらを方形に組み合わせていたと考えられる。下部は直径38cm前後の曲物を据えつけていた。井戸内からは、瓦器埴や人形などが出土している。

SD5 北から南西方向へ曲がりながら伸びる素掘りの溝である。幅約6m、深さ1.5mを測る。西側肩口には丸杭が打ち込まれていたが、護岸の施設は検出できなかった。溝内埋土は、大きく上下2層に分けられ、更にそれは細かく分層することが可能である。いずれの層にも、木枝や種子などの自然遺物が多く含まれていた。この溝は、出土遺物から桃山時代には、ほぼ埋もれていたと考えられる。

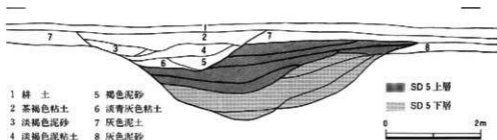


図12 第59次北壁断面図

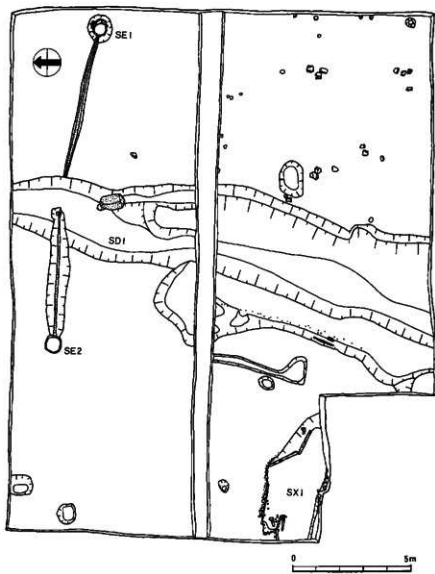


図13 第59次調査図（江戸時代）

Ⅲ. 遺物

遺物は、主にSD5、SE10より出土し、土器・瓦・木製品・金属製品などが多数ある。特に、木製品の遺存状況は良好である。なお、瓦器碗12・13以外はSD5より出土している。

土師器皿(図14、1~8) 口径、器高の違いによって2種類に大別される。いずれも口縁部を横ナデし、底部外面は未調整である。胎土、焼成とも良好である。

瓦器塊(図14、9~13) 11~13は体部外面を不定方向にあらくミガキ、内面は一定方向に丁寧にミガク。底部内面は螺旋状のミガキを施す。9・10は体部外面のミガキは省略され、内面のミガキもあらくなる。

磁器皿(図14、14・15) いずれも龍泉窯系の青磁で、底部はへらで成形し、中央がくぼむ。底部外面をのぞく器面すべてに釉薬を施す。

三彩小壺(図版共1) 底部及び体部下半が残存し、その外面に淡い色調の釉薬が施されている。高台の断面は方形である。

軒丸瓦(図版三1・2) 1は複弁とも単弁とも考えられる八弁蓮華文である。瓦当部外周は横方向に丁寧にへら削りされている。瓦当裏面及び接合部は丁寧に横方向のナデ調整である。胎土は極めて緻密で、焼成は良好である。2は三巴文で、左方向へ巻き込む。尾は細長く伸びるが接することはない。外区には大粒の珠文を配する。范傷が外区内縁から瓦当中心の方向に認められる。焼成は極めて良好である。類例は愛知県吉田窯などで発見されている。

軒平瓦(図版三3~8) 3の瓦当部外縁及び平瓦部側面は丁寧に削られている。頸部は横方向にナデられ、平瓦部凸面は丁寧にオサエで仕上げられている。胎土は緻密で、焼成はやや軟質である。4は瓦当中心に二巴文を飾る小振の瓦である。巴は右へ巻き込み、尾部はたがいに接する。頸部は横方向にナデられ、平瓦部凸面は丁寧にオサエが施されている。平瓦部凹面には、一辺1.1cm程の市松模様をした平織の布目が認められる。また、平瓦凸面には「キ」のへら記号が認められる。焼成は良好である。5は瓦当全面に灰釉が施された硬質の瓦である。頸部及び側面は丁寧に削られ、平瓦部凸面は丁寧にナデ調整である。胎土は緻密である。類例は愛知県吉田窯などに認められる。6は范の打ち込みが深く、文様も鮮明である。頸部は横方向にナデられ、平瓦部凸面にはあらい縄叩き目が認められる。胎土、焼成とも良好である。7・8は瓦当面及び平瓦部凸面に灰釉が施された瓦である。頸部は横方向の丁寧にナデが施され、平瓦部凸面はあらい縦方向のナデ調整である。頸部は5と同じような形態を呈している。

将棋の駒（図版大2） 縦 3.9cm、横幅残存長 2cm（復原幅約 4cm）を測る。表に「金将」と墨書されている。裏面にも墨書の痕跡が認められるが判読できない。

舟形木製品（図版大3） 外面をあらく刀子状の工具で削り、船体を形づくっている。内部はノミで掘り削る。船尾には直径 2～3mm の穴がけられている。

人形（図版大4・5） 厚さ 5mm 前後の板材を刀子状の工具で側面を削り、烏帽子、顔面、首を表現している。また、側面には目、鼻、口などの細部が丁寧に削りだされている。体長の約 1/2 まで削り込みを入れ足部を表現している。

錐（図版大6） 錐身部と柄の大部分を残している。錐身部は長さ 4.2cm、柄部の残存長は 14cm を測る。柄の断面はほぼ円形を呈する。

刀（図版大7） 全長 30cm、棟は幅 5mm を測る。棟は反りをもたず、まっすぐである。鬘、目釘穴をもつ。柄の部分には一部木質部が遺存していた。

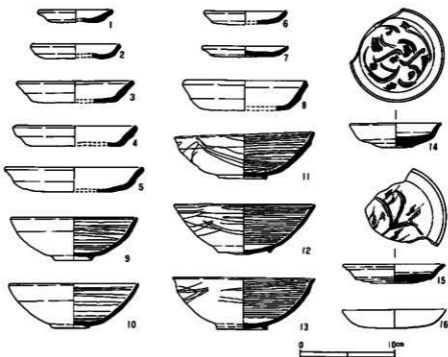


図14 第59次出土遺物実測図

IV. まとめ

今回の調査で検出した溝は、方向や幅などから第10次・32次・49次の各調査で発見された溝と同一のものであると考えられる。この溝は、東殿の南東隅を南西方向に流れていたものと思われる。この水路がどのような目的で、いつごろ掘られたかについては、今後の課題としたい。また、遺構面下に認められた砂礫層より平安前期の遺物が出土したことは、鳥羽離宮造営以前の旧地形及びその形成年代を知る上で、極めて重要な資料となる。



図15 第59次S D 5 南壁断面写真

第60次発掘調査

I. 調査経過

発掘調査は、内畑児童公園西側の畑地で実施した。当地は、慶長年間に整備された安楽寿院十二ヶ院の大善院跡にあたるのが、現存する古図によって明らかになっている。この付近で実施した調査は過去5回にわたり、平安時代から江戸時代に至る各時代の遺構・遺物が数多く発見されている。今回の調査は、調査面積が小範囲であったため、掘土置場の都合上調査区を東西にわけ、発掘を実施した。

II. 遺構

調査の結果、検出された遺構は、大善院関係の各遺構や鳥羽離宮期の石敷遺構などである。調査地の基本層序は、耕土下すぐに大善院の建物跡の整地層が約80～100cm前後認められた。その下に厚さ20cmの茶褐色泥砂が認められ、更にその下には、茶灰色砂泥・淡灰色泥砂が堆積していた。淡灰色泥砂の下は、地山の茶褐色砂礫となる。以下、検出した遺構について述べることにする。大善院関係の遺構としては、建物跡、土塀跡、井戸、暗渠などを検出した。建物の礎石は耕作時にかなり抜き取られていたが、抜き取り穴の痕跡によって柱の位置を知ることができた。なお、詳しい間取りについては、現在整理中のため、報告は後日にゆずりたい。調査区北側で検出した建物遺構は、礎石と礎石との間に丸瓦を一列に並べている。礎石には河原石が用いられている。調査地の東側で検出した土塀跡は、

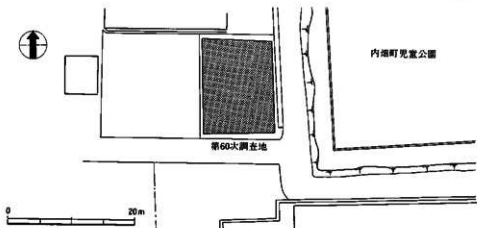


図16 第60次調査位置図

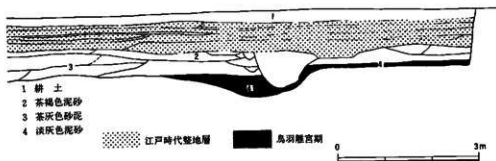


図17 第60次西壁断面図

つい最近まで保存されていたが、道路工事のため、そのほとんどが破壊されてしまった。土塀の石垣は花崗岩の切石を2列に並べて作られていた。大善院関係の遺構面は3面認められた。各面に検出された遺構の柱位置や施設は若干異なっていた。地山直上で検出された鳥羽離宮期の遺構としては、北から南へゆるやかに下がる石敷遺構を検出した。石敷に使用されていた石は、拳大の扁平なもので、その外面は極めてなめらかなものであった。

Ⅲ. 遺物

出土遺物中で最も多く認められたのは棧瓦で、土器類は各時代を通じて極めて少なかった。

水滴（図18、1） 大善院の第2回目の整地層中より出土したもので、注口部は欠落している。外面の釉薬は剝離が著しくほとんど遺存していない。他にこれと同様なものが、第3整地層から数点出土している。

玉（図18、2） 水滴と同一の層より出土したものである。直径約1.5cmを測り、中央部に径6mmの穴があげられている。外面には緑色のガラスが波状に飾られている。



図18 第60次出土水滴・玉実測図

Ⅳ. まとめ

今回の調査で、児童公園西側の調査はほとんど終了したことになる。これらの調査で、安楽寺院十二ヶ院中の遍照院、大善院関係の遺構がかなり具体的に明らかになった。また、先に述べたように、十二ヶ院関係の古図が残存していることから、検出した遺構をより一層明らかにすることができる。加えて、古図に記載されていない遺構も検出できた。

第63次発掘調査

I. 調査経過

今回の調査は、住宅兼事務所建築に先だつ事前調査である。調査地は、白河天皇陵の北方約120mのところに位置し、宅地として利用されているが、これより西側は畦畔が広がっている。第24次調査が西隣で行なわれ、中世から近世にわたって、柱穴・井戸が検出されている。今回も、鳥羽離宮期の遺構は認められず、中世以後の溝と柱跡が発見された。しかしながら、調査面積が狭小なため、建物跡の詳細は不明である。

II. 遺構・遺物

基本層序は、30cm程が現代攪乱層で、暗茶灰色砂泥・褐灰色泥砂・灰色砂礫と続く。

検出された遺構は、溝(SD1・2)・ピット・礎石・土壇である。ピットは多数見つかかり、切り合っているものもある。ピットには、底部に根石をおくものとなないものがある。他に礎石がみられるが、いずれも小規模なものである。溝は、南北に走るものが2条検出されている。SD1は、溝1.9m深さ75cmで、東層は東壁北端部でわずかに認められるのみである。埋土は上層が暗褐色泥砂、下層が暗灰色混礫泥土である。遺物は土師器・陶磁器・天目茶碗が出土している。SD2はSD1より古く、調査区西部で、SD1と2m離れて並行して検出されている。SD1と同様、灰色砂礫層より掘り込んで作られている。幅は90cm、深さが60cmのU字型を呈する。埋土は上層が暗灰色砂礫で、下層が暗灰色混礫泥土である。

遺物は整理箱に4箱出土し、瓦・陶磁器・土師器・瓦器・須恵器・銅銭(寛永通宝)等があるが、大半は中世以後の遺物である。その中で、天目茶碗の破片が多くみられ、釉薬が黒色のものと、白色のもの2種類ある。

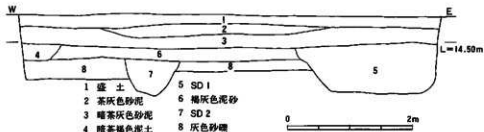


図19 第63次北壁断面図

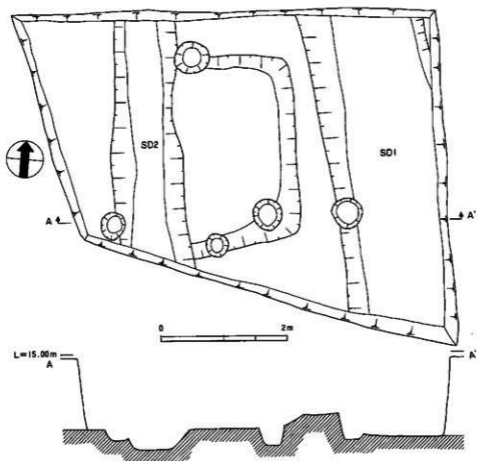


図20 第63次調査区

Ⅲ. まとめ

今回の調査では、鳥羽離宮期の遺構は発見できず、中世以後の溝と柱穴が検出された。しかしながら、建物跡の詳細は、調査面積が非常に狭小なために、明確にすることができなかった。柱跡は、中世から近世にかけてのもので、素掘りのビット・底部に根石をもつもの・礎石と3種類みられ、中世より引き続いて、当地に建物が存在していたことを示している。北東へ50m離れたところで、第54次調査が行なわれ、中世以後の堀と柱穴群が検出された。第54次調査と今回の調査は、堆積状況やビットの検出状況が似かよっている。かなり広い範囲で、中世の集落跡が広がっていると思われる。

第64次発掘調査

I. 調査経過

今回の調査は、住宅新築工事に先だって実施した発掘調査で、近接した南北の区画整理道路（北トレンチ）と並行して行なった。調査地は、竹田内畑町の集落北西端に位置し、宅地として利用されていたところである。調査地まで民家が建ち並んでいるが、これより北は一段下がり、水田が広がっている。近辺の発掘調査の成果をみると、北側にあたる第18次調査では全面低湿地、第34次調査では溝状遺構が見つかり、北半が低湿地状になることが確認されている。第54次調査B区では、中世から近世へかけての建物跡(柱穴群)・井

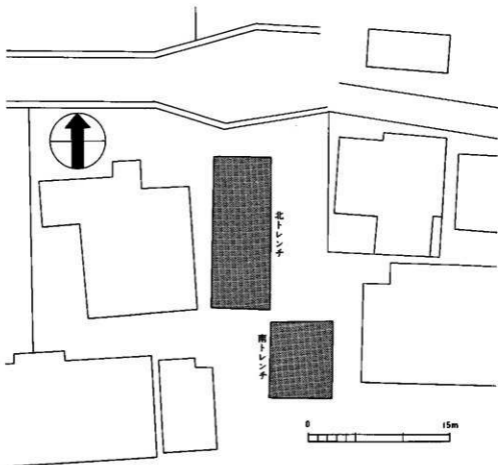


図21 第64次調査位置図

戸・溝跡が検出された。

調査は、北トレンチと南トレンチを設定し、耕土層と近代盛土を機械によって掘削を行ない、近世に比定される層から開始した。調査に際しては、民家の出入口の関係と、樹木・井戸によって制約を受け、狭い面積しか調査できなかった。調査の結果は、鳥羽離宮期の遺構は認められず、中世以後の井戸・柱穴群が発見された。

II. 遺構

基本的な層序は、上層より耕土(15cm)・黄茶色砂泥(10cm)・灰褐色砂泥(15cm)・茶褐色砂泥(10cm)・暗灰色泥土(15cm混砂礫)の順で、地山は茶褐色砂礫である。黄茶色砂泥層までガラス片を含む現代層、灰褐色砂泥と茶褐色砂泥が近世、暗灰色泥土が中世の遺物を包含する。北トレンチでは、南トレンチと若干層序が異なっている。茶褐色砂泥の上に灰色砂泥と黄灰色粘質土が、交互に、薄く重なりあっているのが認められた。それと、北から6mのところまで、地山層が北へ下がる肩が認められ、この部分に青灰色粘土が堆積している。

検出された遺構は鎌倉時代から江戸時代へかけての柱穴群・井戸・溝・土壇等である。井戸は2基(SE1・2)検出されている。SE1は南トレンチの中央に位置し、楕形の大きさは、南北2.8m東西2.7mで、隅の丸い方形である。底に木枠が置かれ、その上に径30cm程度の石が方形に、平たい面を内側にそろえて組まれている。石組みは、北西隅が崩れ内部に落ち込んだ状態で認められたが、ただ一段のみ木枠の上に遺存していた。木枠は、縦30cm、横70cm、厚さ2cm程度を測る四枚の板を用い、それぞれの両側面に納穴をあけて、たがいに組み合わせて作られていた。出土遺物は、土師器・陶磁器・軒瓦・木器が整理箱2箱分出土した。SE2は北トレンチの東壁中央付近で見つかった。一辺80cmの方形の木

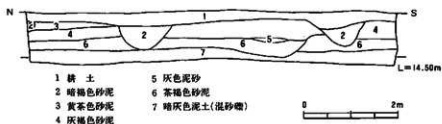


図22 第64次東壁断面図

組みで外側が、幅15~20cm、厚さ1cmの板を縦にし、その内側に幅20cm、厚さ2cmの板を横に組んでいる。その内側には直径40cmの曲物を置く。井戸内からは軒瓦・瓦・陶器が若干出土した。SE2を切って、南側に不定形の土壇が検出されたが、野鍛冶に使用されたと思われる高温度を受けた窯壁の破片が、焼土と共に多量に出土している。柱穴と考えられるピットは、南トレンチ、北トレンチともに多数検出された。だが、調査面積が小さいために、建物跡としてまとめられない。ピットは径30~60cm、深さ10~50cmと大小見つきり、何回も作り替えられたことを示している。ピットには素掘りのものと、底部に平たい根石を置くものがある。

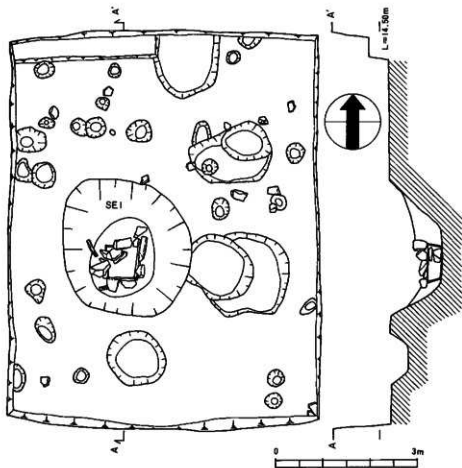


図23 第64次調査図(南トレンチ)

Ⅲ. 遺物

出土遺物には、土師器・瓦器・陶器・瓦質土器・石器・木製品などがあり、それらは整理箱に18箱ある。遺物は北トレンチで認められた青灰色混礫泥土層から、一括して出土しているため、これを主として述べる。

土師器は皿が大半で、口縁部から底部にかけてゆるやかに外反する。口縁部は右方向にかるくヨコナデする。底部内面は不定方向にナデる。底部外面は未調整である。瓦器はすべて埴である。底部から口縁部にかけて徐々に内彎する。体部外面には全くミガキは認められず、体部内面のみあらいミガキが認められる。高台は低く断面三角形である。胎土、焼成とも良好である。出土遺物の中で最も多く認められたのが、瓦質の羽釜と鍋である。羽釜は口縁端部を丸く仕上げるもの、丸く凹むもの、口縁外側が凸帯状になっているものとに分けられる。鍋は口縁部が外に強く折り曲げられ内彎するものと、なだらかに内彎するものがある。すべて、内面の調整はハケ目、外面は指オサエの未調整である。その他に内外とも黒色化していないものと、三足の脚が付くものが1点ずつ出土している。また、直径18cmの滑石製の羽釜の破片が1点ある。厚さは1cmで、口縁より2cm下に幅1.5cmの鐙を削り出しており、鐙の0.5cm下には径1.1cmの小穴をうがっている。外面には全面煤が付着している。陶器には六古窯系の甕・鉢が認められるが、その出土数はさほど多くは

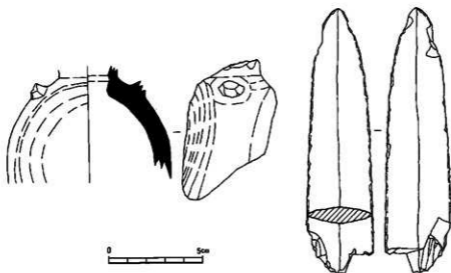


図24 第64次出土石刺・提瓶実測図

ない。なお、地山直上に認められた遺物包含層からは、弥生時代中期の土器片や磨製石剣などが出土している。弥生土器の器形は壺で、外面には簾状文や斜格子文が認められる。また、古墳時代の須恵器の提瓶も出土している。

Ⅳ. まとめ

これまで当調査地周辺部では、第18次・第34次・第35次・第54次B区の調査が実施された。その結果、当調査地北側で行なわれた第18次・第34次調査では低湿地、また、南東方向で行なわれた第54次B区調査では東西方向の溝跡及び建物跡が多数検出された。今回の調査は、小面積ながら、低湿地と陸部をわける境目と陸部南側に建物群と井戸跡を検出することができた。調査地の南半には柱穴が多数あり、何回もの建て替えが行なわれたことを確認した。地山の高いところに、中近世の建物跡が形成されていることが、第54次調査で明らかにされており、現況の竹田内畑町の北西部の集落と一致している。中世以後現代まで、そのまま集落が受け継がれていると考えられる。

第65次発掘調査

I. 調査経過

当調査は、建築工事に先だって実施した事前調査である。調査地は、名神高速道路京都南インターチェンジのすぐ南側に位置している。近年、この付近の再開発が急速に進み、昔のおもかけをとどめているものといえば、調査地の南に見える秋の山と城南宮の森だけになってしまった。この周辺で実施した主な発掘調査には、昭和43年度に行なった第39次・43次・45次調査がある。第39次調査では、南北方向に伸びる築地及び側溝を確認した。今回の調査地北側で実施した第43次調査では、雨落溝を備えた建物跡の北東隅を発見した。また、東側雨落溝の東方に建物を取りまく石垣を検出した。更に、同年当該地の南側で行なった第45次調査でも雨落溝を伴った建物の南東隅や石垣を確認した。あわせて、建物及び石垣を取り囲むように伸びる溝を発見した。この2回にわたって検出した建物は、雨落溝や石垣の方向及び構築方法より、同一の建物であると推定された。今回の調査地は、第43次・45次調査の中間部に位置し、建物中央部に推定されるところにあたる。

II. 遺構

今回の調査で検出した主な遺構は、雨落溝を備えた建物1棟、礎石建物1棟、石垣跡、溝などがある。当調査地は、数年前に水田を山土で土盛した埋立て地である。その折、耕土の一部を掘出している。調査地の基本層序は、現代盛土下に旧耕土が所々認められる。耕土下に厚さ10cm前後の暗灰褐色泥砂が堆積し、その下に灰褐色泥土がある。茶褐色砂泥は石垣跡を境にして東側にだけ堆積し、西側には全く認められない。淡茶褐色粘土は石垣の西側にだけ認められ、西から東へ向って徐々に厚く堆積している。灰色泥土は茶褐色砂泥と同様に石垣の東側のみ堆積している。以下、検出した各遺構について述べる。

S B 1 雨落溝を備えた南北棟である。この建物規模は、北辺と南辺の雨落溝心々距離43m53cm前後を測る。東西方向については、今後の調査を待たなければならない。建物の柱位置を知る明確な礎石は検出されなかった。ただ、調査区の南側で花崗岩が検出されたが、これが礎石となるかどうかについては、現在のところ明らかでない。また、建物基壇内に南北方向に並んだ石の抜き取り穴が検出された。この抜き取り穴は、先の2回の調査などでも検出されている。

S D 2 S B 1に伴う雨落溝で、外幅120cm、内幅30cm、深さ10cmを測る。溝は、頭大

河原石を左右に2列づつ並べて構築されている。溝は建物東西中軸線より北へ3.2mの地点及び南へ3.1mの地点で、供に西側へ約80cm折れ曲がる。折れ曲がった部分の内側は、一部一列だけ石を並べて溝を作っている。溝の底部にはなんら施設は認められない。

SB2 礎石建物で梁行2間、桁行3間の南北棟である。この建物とSB1とは東西の建物中軸線が一致する。建物の柱間寸法は、桁行8.25m—中央間3.97m・脇の間2.14m、梁行2.74m—各柱間1.37mである。礎石は4ヶ所遺存し、それらの材質は、凝灰岩(1)、花崗岩(3)である。あとの礎石は、すべて抜き取られていたため不明である。しかし、抜き取り穴の底部に花崗岩の風化した痕跡をとどめていたものが、2ヶ所で認められた。礎石のうち3ヶ所は、円形の柱座を造り出していた。礎石の据え付けに際し、根固め石などはほとんど使用していなかった。

SX1 SD1の東側約3m地点にある南北方向の石垣である。今回の調査区では、石はすべて抜き取られており、旧状を知ることはできなかった。しかし、第45次調査では、自然石を一段だけ据え付けていることを確認しており、当調査区のSX1もそれと同様のものであろうと考えられる。

SD3 建物・石垣を大きく取り囲むように掘られた素掘りの溝で、幅約1.5m、深さ約1.1mを測る。溝内埋土からは、雨落溝内より出土した軒瓦と同文のものが出土している。

地業 建物の造営にあたっては、石垣跡より東へ2.2m前後の地点から、いわゆる掘り込み地業を行なっている。このことは、過去2回の調査でも確認されている。地業は、古墳時代・平安時代前期の遺物を包含する土層を約40cm前後にわたって掘り下げ、楕円形で拳大の礫を突堤状に幅約7.2m、高さ約1m以上にわたって積みあげていた。石の積みあげは、西に高く東へ行くに従って徐々に低くなり、雨落溝下近くで終る。その後、石積み周辺

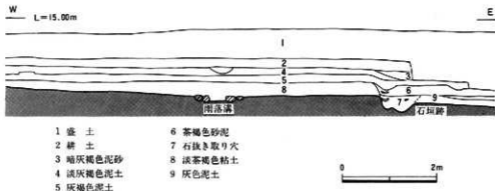


図25 第65次北壁断面図

を磯まじりの土で数回にわたって土盛を行なっている。なお、SX1の石を地業のどの段階で据え付けて、石垣を構築したかについては、石が完全に抜きとられていたため、明らかにすることはできなかった。また、SB1に直接伴う基壇がどのような状態であったかについても、削平が著しかったために明確にすることはできなかった。鳥羽離宮などにおいて、この様な特異な地業の例は、他に発見されていない。ただ、舟入り遺構の石積みがこれによく似ている。

Ⅲ. 遺物

出土遺物のほとんどは瓦であり、土器は古墳時代・平安時代のものが、掘り込み地業内よりきわめて少量出土している。以下、今回の調査で、雨落溝内より出土した軒瓦を中心に述べ、あわせて第43次・45次調査の雨落溝から出土した一連の軒瓦についても若干の説明を行ないたい。

軒丸瓦(図版三9~14) 9はかなり簡略化された八弁蓮華文である。中房には1+4の蓮子を配する。瓦当裏面の接合部を強くオサエる。胎土は緻密で、焼成も良好である。玉縁部には釘穴が認められる。10は複弁の退化したものと思われる六弁蓮華文である。中房には1+6の蓮子を配する。范の彫りはきわめて浅い。瓦当面には糸切り痕が認められる。丸瓦部凹面には布目痕は認められない。胎土、焼成とも良好である。11は簡略化された蓮華文で、類例より八弁であると考えられる。范の彫りが浅いことや摩滅していることから、文様は鮮明でない。胎土はやや砂粒を含み、焼成はやや軟質である。12は左方向へ巻き込む三巴文で、尾はすべて接する。巴の断面は平坦である。胎土、焼成とも良好である。13は右方向に巻き込む三巴文で、尾は1ヶ所だけ接しない。巴の断面はごくわずかにもり上がる。瓦当裏面は丁寧なナデ調整をする。胎土は緻密、焼成は良好である。14は左方向へ巻き込む三巴文で、尾は接することがない。外区外縁の内側は角ばらず、丸くなる。巴の断面は丸い。瓦当部外周下半は丁寧にケズられている。胎土は良好で、焼成はやや軟質である。

軒平瓦(図版三15・16) 15の左右に伸びる唐草はとぎれることなく連なり、瓦当中央には内区を左右に別ける突線が一条走る。接合方法は、いわゆる「包み込み式」である。胎土、焼成とも良好である。16は右方向に巻き込む三巴文で、尾は接するものとそうでないものがある。范の彫りは深く、鮮明である。頸部は横方向にナデられる。接合方法は、いわゆる「包み込み式」である。胎土、焼成とも良好である。

次に、第43次・45次の軒瓦についてその概略を述べ、今回の調査で出土した軒瓦の参考にしたい。

第43次出土軒丸瓦(図版壹17~24) 17・18は文様、范の彫りなどがたいへん似かよっており、同范の可能性が高い。中房はやや盛り上り、周囲には一条の沈線がめぐっている。蓮子は1+4である。内区には八弁の蓮華文が配され、弁と弁の間には突線が認められる。17の瓦当外周はほぼ范と同一の大きさに仕上げられている。瓦当裏面はやや盛り上り、丁寧にナデられている。18の丸瓦部は瓦当直径よりもやや大きく、瓦当外周を范よりもやや大きめに仕上げられている。瓦当裏面は丁寧なナデ調整を施し、瓦当外周下部及び瓦当裏面下半をへら削りしている。19は八弁蓮華文で、中房は大きく、1+8の蓮子が配されている。胎土、焼成とも良好である。20・21とも八弁蓮華文で内区を飾り、中房には1+5の蓮子を配する。中房外周には芯がめぐる。20の焼成はやや軟質である。21は胎土、焼成とも良好である。22は複弁で六弁の蓮華文を飾る。文様の彫りは浅いがシャープである。中房には1+6の蓮子を配する。胎土、焼成とも良好である。23は右へ巻き込む三巴文である。頭部は瓦当中心で接する。尾は圏線に接しない。瓦当部の大きさは丸瓦部の大きさよりも大きい。瓦当面には離れ砂が認められる。焼成は良好である。24は左方向へ巻き込む三巴文で、尾は太い圏線に接する。23と同様に瓦当は丸瓦部より大きい。

第43次出土軒平瓦(図版壹25~32) 25~30はいずれも右方向に巻く三巴文である。25は巴が下外区外縁に接する。胎土、焼成とも良好である。26~29は彫りの浅い巴を配し、尾の一部は接する。瓦当面には離れ砂が認められる。焼成はいずれもやや軟質である。30は彫りの深い巴文で、尾はたがいに接し円弧を描く。焼成はやや軟質である。31は左に巻き込む三巴文で、頭部は接するが、尾は接しない。文様の彫りは深く、シャープである。接合方法は、いわゆる「包み込み式」である。32は、第65次出土の軒平瓦と同范の唐草文軒平瓦であり、成形手法も同様である。

第45次出土軒丸瓦(図版壹33~38) 33は左方向に巻き込む三巴文で、尾は長くすべて接する。巴の断面は平坦である。胎土は緻密で、焼成は良好である。34は右方向に巻き込む三巴文で、尾は二ヶ所で接する。胎土は緻密で、焼成は良好である。35は左方向に巻き込む三巴文で、頭部はすぐに細くなり、尾は長く伸びる。巴の断面は平坦である。胎土は緻密で、焼成は良好である。36は右方向に巻き込む三巴文で、尾は長く伸び、たがいに接し、圏線を描く。胎土は緻密、焼成は良好である。37は左方向に巻き込む三巴文で、尾は接しない。巴の断面はやや丸い。胎土は緻密、焼成は良好である。38は右方向に巻き込む

三巴文で、頭部、尾部とも接し、尾部は圏線を描く。外区には圏線がめぐる。胎土、焼成ともに良好である。

第45次出土軒平瓦（図版壱39～42） 39・40は右方向に巻き込む三巴文で、巴は内区幅いっぱいまで配されている。胎土、焼成ともに良好である。41は唐草文の退化したものと考えられ、瓦当中心部に内区を左右に二分する突線が一条走る。胎土、焼成とも良好である。42は簡略化された唐草文である。接合方法は、いわゆる「包み込み式」である。胎土、焼成とも良好である。

IV. まとめ

今回の調査で、雨落溝を伴う建物跡やその東側周辺部をほぼ完掘することができた。しかし、今回の調査でもSB1に伴う明確な礎石は検出されなかった。このため、柱位置や建物規模についての解明は今後の調査に期待したい。先年度の調査で発見した雨落溝が、本調査地中央部で建物側へ曲ることを確認した。更に、その東側で礎石建物を検出した。このような建物遺構の例は、鳥羽離宮跡はもとより、平安京やその周辺部の調査でも認められていない。また、断割の結果明らかになった地業は、礎を突堤状に積みあげ、周辺部を礫まじりの土で盛りあげるといったこれまた特異なものであった。第43次・45次調査でも断割を実施したが、今回検出したような地業内の石積みは発見されていない。なぜ、一連の地業でありながら、このように異なった状況を示すかについては今後の問題点として解明していきたい。3次にわたる調査で、一連の雨落溝及びその周辺部より軒瓦が多量に出土した。これらの軒瓦を各調査地ごとに観察してみると、それぞれに特色ある傾向が認められる。第43次調査——SB1北東隅付近では、図版壱のように、軒九瓦では蓮華文が主流を占め、巴文は少ない。軒平瓦は圧倒的に巴文が多く、唐草文を飾るものは極めて少ない。今回の調査で検出した建物中央部では、軒九瓦は蓮華文及び巴文がほぼ同じような状況を示し、軒平瓦でも巴文と唐草文などがほぼ同一の割合を示した。第45次調査——SB1南東部付近では、軒九瓦、軒平瓦とも巴文が主流をしめている。以上のように、同一建物の東側の軒先においても、部分部分によって軒瓦の相異が認められた。従来、平安後期になるにつれて、瓦当文様が多種多様になると言われているが、同一遺構で直接建物に結びついて発見された例は少ない。今回の例は、そのような意味で極めて貴重な例といえる。なぜ、このような状況をしめすかについては、今後の課題としたい。

第66次発掘調査

調査概要

今回の調査は、民家の新築工事に先だって行なったもので、既存の建物の北と南に調査区を設定した。北トレンチと、南トレンチと呼ぶ。

北トレンチは、これまで水田として利用されていたところである。基本的な層序は、耕土・床土・暗灰色粘土・茶褐色砂礫層と続いている。暗灰色粘土の上層までは近世の遺物が含まれる。付近のベースとなっている茶褐色砂礫層は、表土より深さが1.5mで認められたが、遺構は検出されなかった。茶褐色砂礫層は湧水が激しく、約2mまで掘り下げて途中で中止した。茶褐色砂礫には、少量ではあるが、古墳時代の須恵器・土師器が磨滅した状態で出土している。

南トレンチは北トレンチと異なり、耕土と床土の下には褐色系の砂泥層が1m程続き、それから暗灰色粘土になる。遺構は検出されなかったが、褐色砂泥層に瓦・土師器・瓦器の破片が少量含まれる。

今回の調査では、両トレンチともに鳥羽離宮期の遺構は認められなかったが、北トレンチでは湿地状を呈し、南トレンチ以南にははっきりした褐色系の砂泥層があり、遺構の存在する可能性があることがわかった。この辺が鳥羽離宮東殿の北限であろうか。茶褐色砂礫層には、磨滅しているが、古墳時代以前の遺物が含まれていることが確認でき、近辺に、古墳時代以前の遺跡が存在することを推定させるものである。

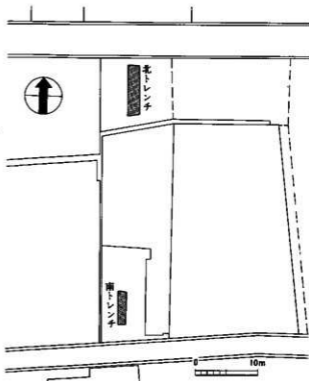


図26 第66次調査位置図

第67次発掘調査

I. 調査経過

この調査は、民家の新築工事に先だって実施した事前調査である。調査地は、竹田中殿町の、田中殿児童公園より東方50mに位置する。現在、一帯が水田として利用されている。近辺は、鳥羽離宮田中殿跡と推定され、第2次・第14次・第30次調査が行なわれている。そして、田中殿に関連する建物の地業跡が検出され、成果をあげている。今回の調査地は、第14次調査C区の東側に接している。第14次調査C区では、青灰色粘土が耕土下より2m続き、池の底と判断されており、今回の調査地も、遺構の存在があまり期待されなかった個所である。当地は、区画整理が実施される以前には、北東から南西へ向かって、斜めに用水路が通っていた場所である。第14次調査の際には、この用水路が使用されていたため調査できなかった。

II. 遺構

層序は、流路のため複雑であるが、基本的には耕土・茶褐色砂・淡灰色粘土・暗灰色泥土(混礫)・黒灰色シルト・暗灰色粘土・褐色腐植土の順に続いている。

検出された遺構は、江戸時代から流れていたと思われる用水路と、田中殿に関連する池の汀線である。用水路は、流れが若干変化している。溝は、肩部に土留めの杭を打ち込み、横に竹を並べたものである。一時期古いものが、同一方向で、少し北にずれて見つかり、これも杭跡が残っている。用水路の下層に、小石を敷いた遺構が検出され、それが入りくんだ汀線を形成していることがわかった。5~10cmの小石は、なだらかな汀の肩部にはりつけられている。用水路と同一方向に北西へ向けて下がる汀線と、トレンチの南部

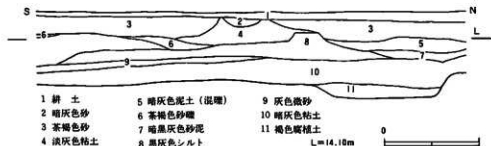


図27 第67次西壁断面図

で南東へ下がる汀線とがあり、中央が高くなっている。南側の石敷きは直線ではなく、曲線を描いている。

調査区の北部で土器溜めが検出された。掘形はみつからず、汀の底部に遺物が溜まったような状態である。土器類は細かく割れたものばかりで、径3mの範囲で多量に出土した。

Ⅲ. 遺物

この調査で出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦器・磁器・陶器等、整理箱に9箱である。土器溜めの遺物は、平安時代末期の一括遺物とみられるもので、貴重な資料であるため、今回はそれらを述べることにする。

土器溜めからは、整理箱に3箱出土した。土師器が最も多く、瓦器・磁器・硯が少量含まれる。

土師器（図29、1～9）は皿のみで、3種類に分けられる。口径が10cm前後の皿は、底部未調整で体部よりヨコナデし、口縁部を丸くおさめる。口径が15cm前後の皿は、体部外面を2段にヨコナデするものと、幅広く1段でナデするものがある。口縁は内彎ぎみにヨコナデする。もう一種類は、口縁部を内側に折り曲げたものである。

瓦器（図29、10）は、断面台形の高台を張りつけ、外面を3分割の粗いミガキで、内面は細かくミガキを施すものである。また、底部には平行線状のミガキを施し、口縁内側には沈線がつく。

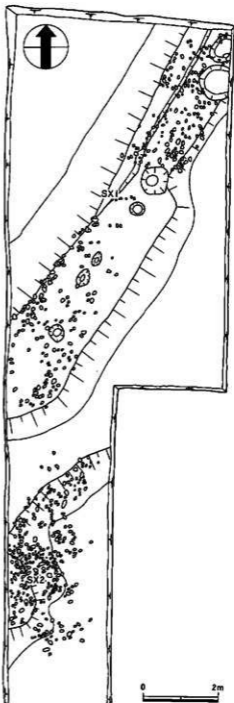


図28 第67次調査図

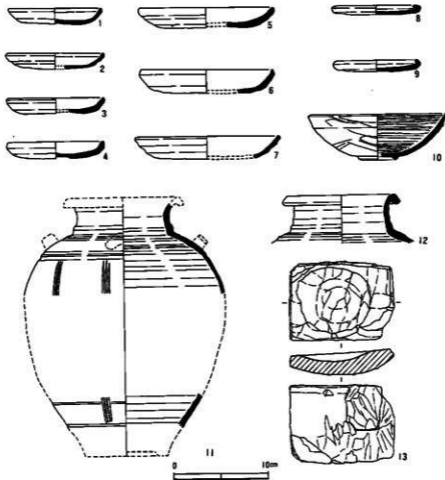


図29 第67次出土遺物実測図

白磁四耳壺(図29、11・12)の破片が3個体分出土している、体部は、肩まで縦に3本のクシ目をつけ、頸部は真直ぐ立ち上がり、口縁部は外下方に折り曲げる。底部と耳の部分は見つからない。3個体とも淡緑灰色の釉をかけている。

石製品(図29、13)が1点出土しているが、羽釜の破片を硯に転用したものと思われる。元の羽釜は厚さ1.3cmで、体部から口縁にかけて内彎しながら立ち上がり、口縁端部は平たく削る。口縁外面には縦4.5cm、横3cmの耳の痕跡が残る。長い方の一边は、羽釜の口縁端が原形を保つが、耳は削り取られている。内面は、中央のくぼんだところを残して、外周を平らに削る。外面には、煤が付着している。

Ⅳ. まとめ

今回の調査は、池の中と推定されていたところであったが結果は汀線が見つかり、烏羽離宮の庭園が、複雑に作られていることが判明した。この汀線の続きは道路になるため不明であるが、周辺には水田が広がっており、遺跡の破壊が少なく、今後の調査が大いに期待される。

これまで検出された烏羽離宮の汀線は、肩部に小石をはり付けるもので、洲浜状に曲線を描き庭石を配している。今回の調査でもそれが確かめられた。



図30 東殿・田中殿航空写真

む す び

第57次調査で検出した墓地は、従来その存在が全く知られていなかった。墓地の規模や成立時期、廃絶時期については、今回の調査で明らかにすることができなかった。しかし、慶長年間の年号をもつ墓石が出土していることから、この時期には確実に墓地となっていたことがわかる。また、地下水位が高かったため、土壌内の遺存状況もよく、従来ほとんど発見例のない行季状の棺を検出することができた。第58次・59次調査は、近衛天皇陵付近で実施した。第58次調査地付近では、過去数ヶ所で東殿関係の庭園跡が発見されているが、当調査においては、これら一連の庭園遺構を検出することができなかった。しかし、庭園部周辺の旧状況を知る手掛を得た。第59次調査で検出した溝は、第10次・11次・32次・49次調査などで認められた溝と一連のものである。この溝は、北から延び、当調査地で南西方向に徐々に曲がることが明らかとなった。溝は出土遺物により鳥羽離宮期に存在していたことが明らかである。また、東殿とどのような関係にあったかについては、当調査区以北の調査を待たなければならない。当調査で、この溝の埋土より多数の遺物が出土したが、なかでも木製品が多種多様であった。その中で、人形や「金将」と墨書された将棋の駒は特に注目される。これらの年代は13世紀中頃～13世紀末頃に比定できる。第60次・63次・64次・66次調査では、中世末から近世初頭にかけての建物跡・溝などが検出されている。これらと同一年代もしくはやや先行する時期の遺構は、第35次・54次調査などで確認されている。これらの地区では、鳥羽離宮以降の遺構が特に複雑に重複して多数検出されている。今後、これらの一連の遺構を明らかにすることは、鳥羽離宮期から近世に至る当地域の変遷を考える上で、極めて重要なものであるといえる。第65次調査は、過去2次にわたって検出した同一建物東側中央部について実施したものである。当調査で、従来発見されていた雨落溝は、建物中央部で西側へ入り込むことを確認した。また、建物中央部東で新たに礎石建物を検出した。この礎石建物と雨落溝を備えた建物とは、建物の東西中軸線を同一にしている。現在のところ、雨落溝を備えた建物を田中殿地域に造営された金剛心院の九林阿弥陀堂と推定し、礎石建物は、九林阿弥陀堂に付属する礼堂と考えている。また、これらの建物造営に際して行なわれた地業は、主要建物下に突堤状の石積みを築いたという極めて特異な工法である。このことは、平安時代後期の土木技術の水準を知る上で貴重なだけでなく、鳥羽離宮造営に係りあった人々の背後関係を解明する上でも極めて重要なものである。

付編 第57次調査SK2出土中世人骨について

池田次郎

発掘時における骨の残存状態は良好であったが、取り上げ後の乾燥によって骨質はいちじるしく脆弱となり、ほとんどの骨は破損している。比較的よく残っている頭蓋、下顎、四肢長骨も、土圧もしくは乾燥による変形と、緻密質表面の剝離がいちじるしいため、計測に堪える項目はほとんどない。したがって、ここでは、人骨の性、年齢の判定だけについて検討する。

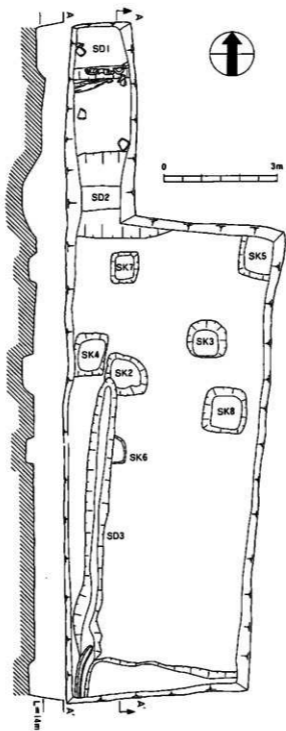
椎骨、肋骨を除くほとんど全身の骨格が残存しているが、性判定の重要な手掛りになる寛骨、仙骨は、寛骨臼の小破片を除き観察することはできなかつたので、筋付着部の発達程度など骨格全体の特徴から男性と推定した。すなわち、上腕骨三角筋粗面、大腿骨粗線は強く、上腕骨の橈骨神経溝は深い。頭蓋では、乳様突起は小さいが、外後頭隆起は強く突出しており、下顎骨も頑丈である。なお、性差が大きいとされている距骨も比較的大形である。

歯は上下顎とも第三大臼歯を含めすべて残っているが、大臼歯の磨耗の程度はかなりいちじるしい。また、頭蓋の三主要縫合である矢状、冠状、人字縫合はいずれも癒合し、矢状縫合などはすでに消失しており、右肩甲骨関節窩の縁には軽度の嚙状骨増殖が認められる。これらの所見を総合すると、本資料は壮年後半—熟年前半、すなわち40歳前後と推定される。

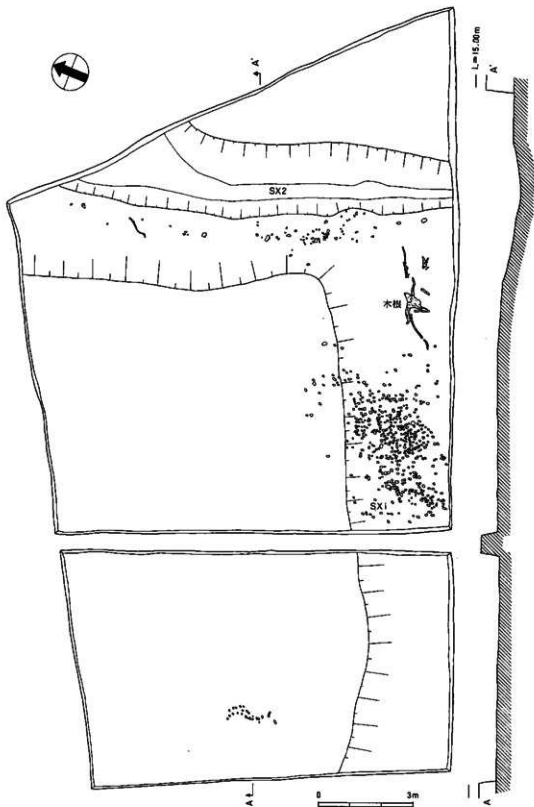
图 版



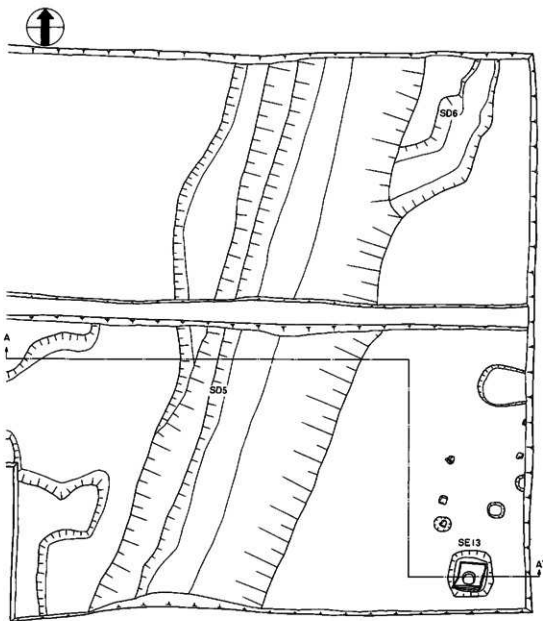
昭和55年度調査位置図 (1:5000)



遺構実測図

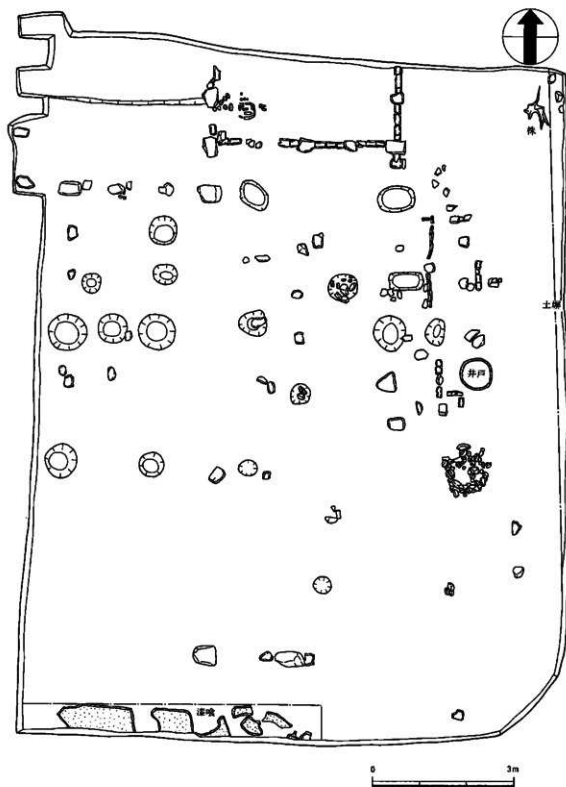


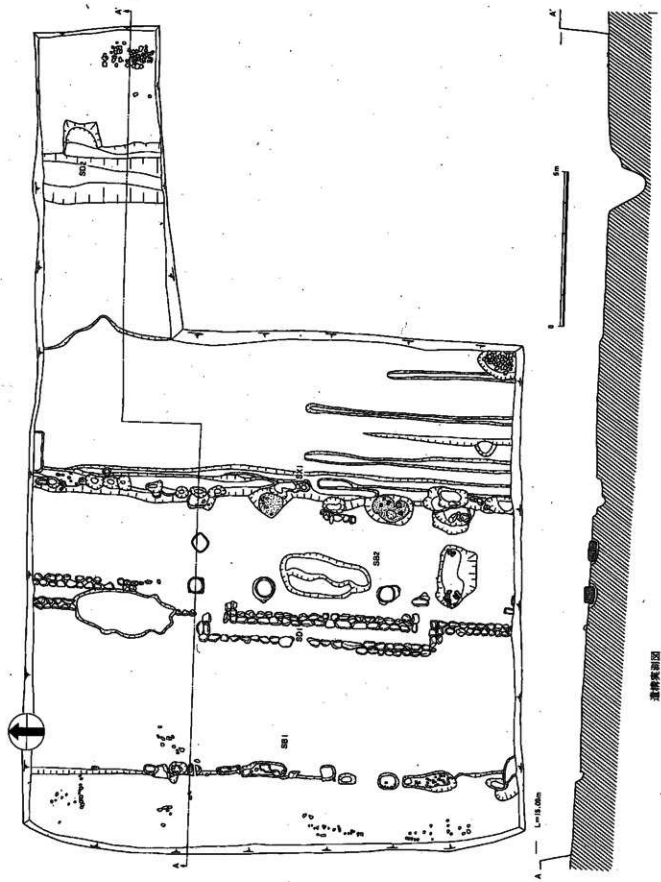
遺構実測図

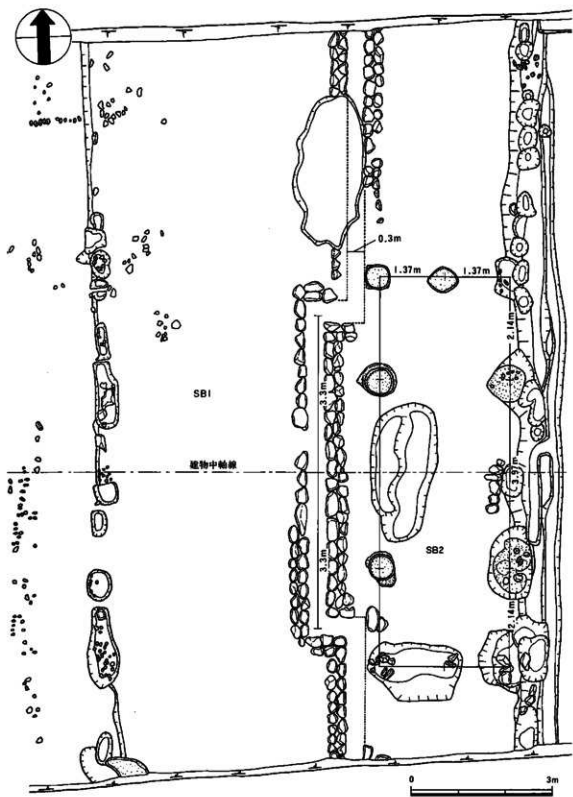


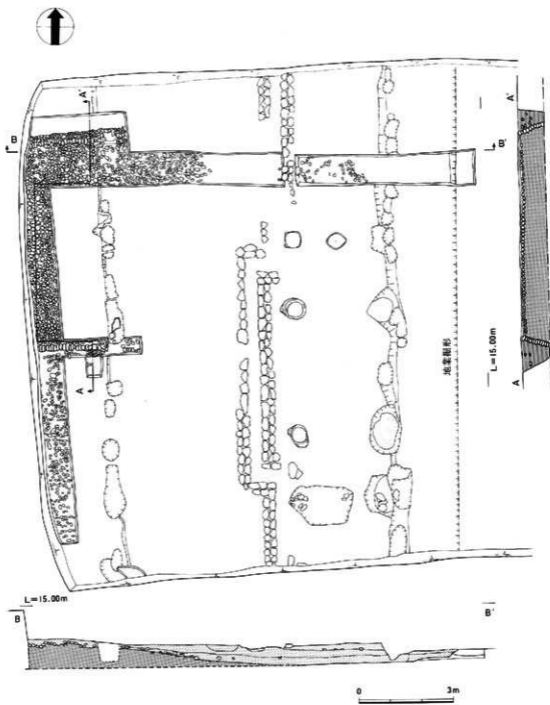
L=15.00m

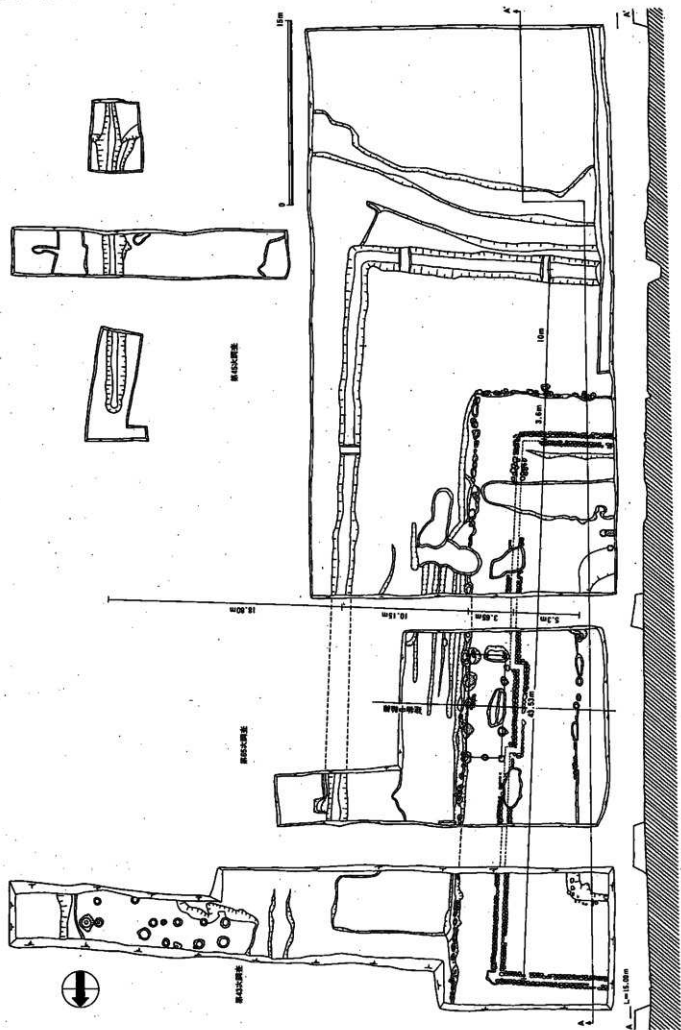


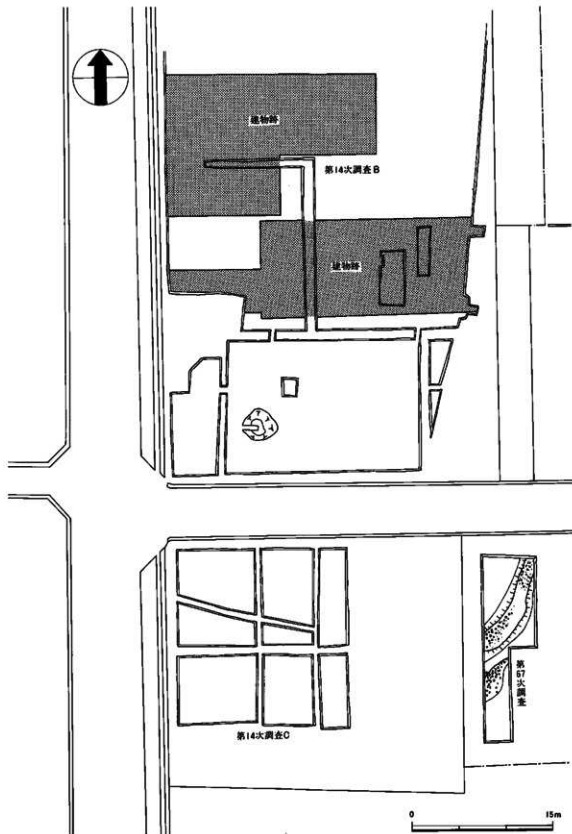




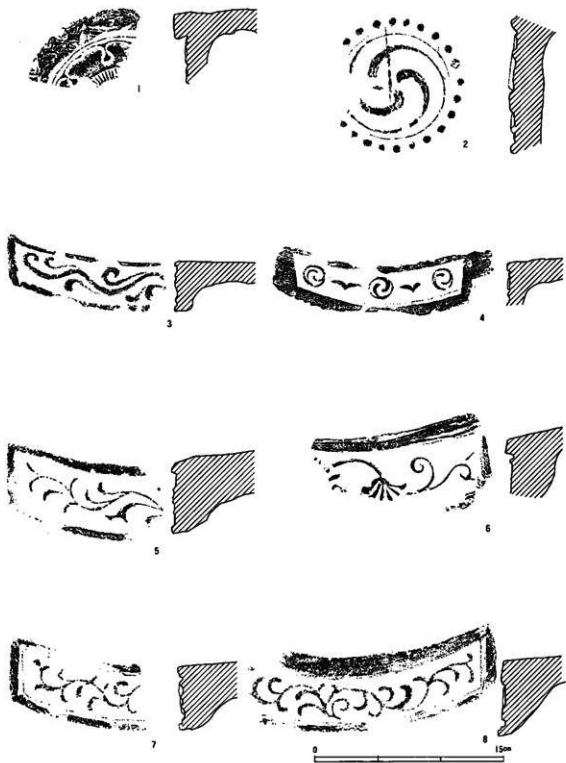


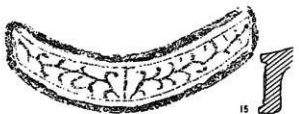
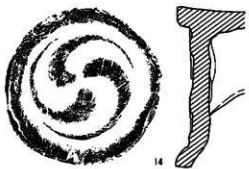
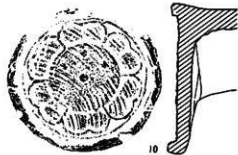
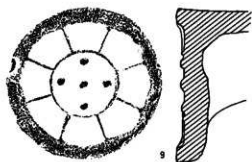




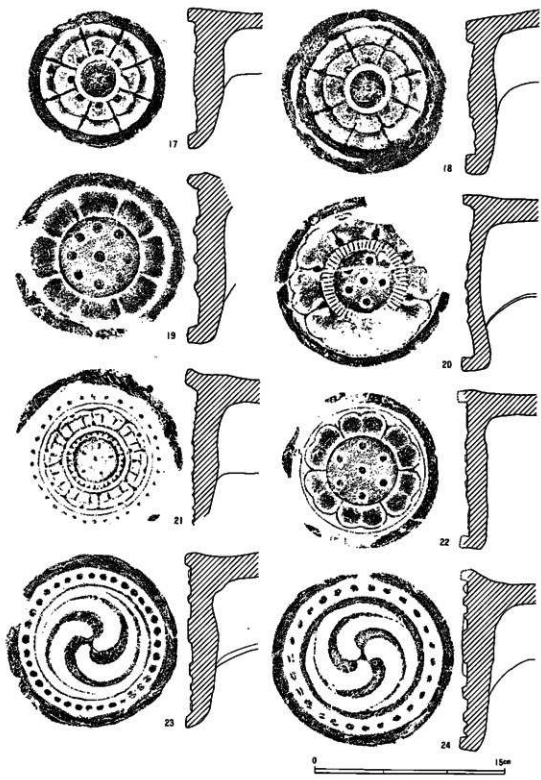


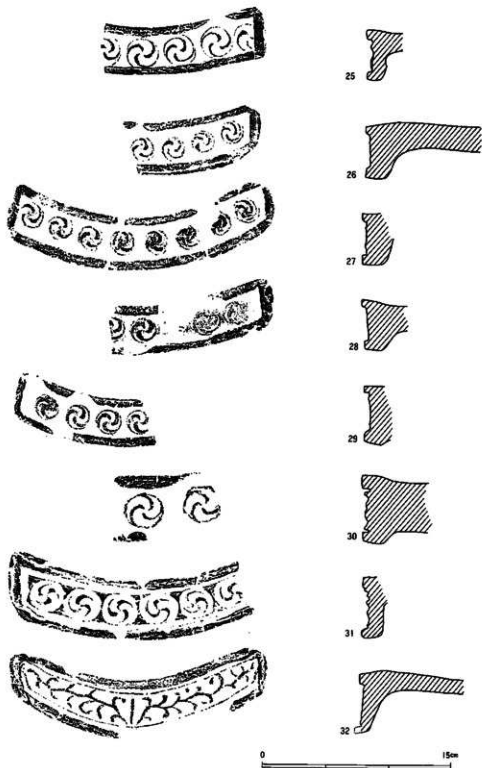
調査位置図

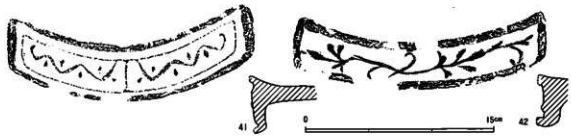
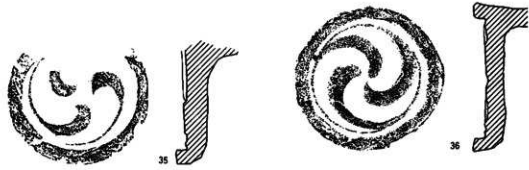
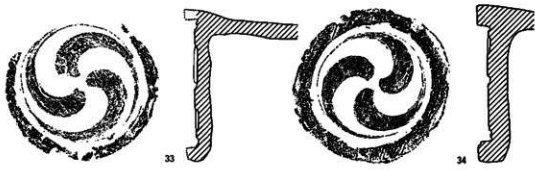


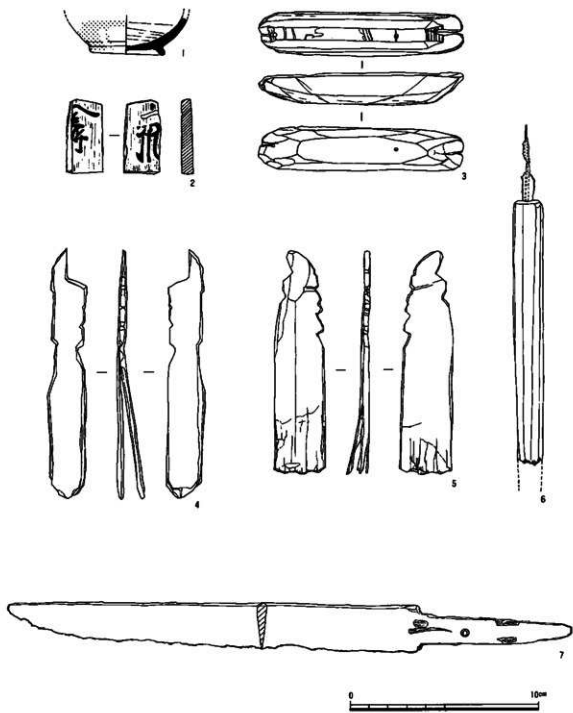


0 15cm









SD 5 出土遺物

三彩小壺1、将棋の駒2、舟形木製品3、人形4・5、錐6、刀7



1. 全景 (北より)



2. SK2 (南より)



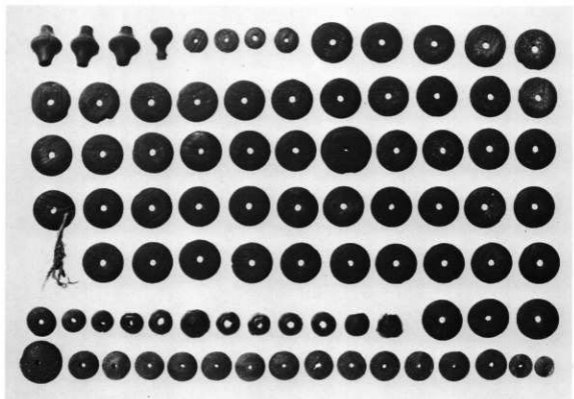
1. SK3(北より)



2. SK7(東より)



1. SK 8 (西より)



2. 数珠玉



全景（北西より）



1. 全景(北西より)



2. SX 2(北西より)



1. 全景（北東より）



2. SX1江戸時代（北東より）



1. SE1・SE2全景(北東より)



2. SE1竹筒接合部(東より)



1. 竹筒接合部 (東より)



2. SD 5 全景 (北東より)



1. 全景 (南より)



2. 建物跡 (南より)



1. 石敷遺構 (南より)



2. 石敷遺構 (南東より)



1. 全景 (北より)



2. 北壁断面



1. 全景(北より)



2. 羽釜出土状況



1. SE 1 (東より)



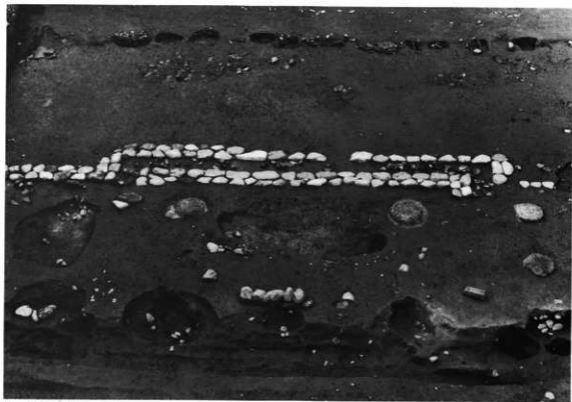
2. SE 2 (西より)



調査地航空写真（南西より）



1. 建物全景（東より）



2. SB2全景（東より）



1. SB1・SD1全景(北より)



2. SD1軒瓦出土状況(南より)



SB1 基壇内抜き穴 (北東より)



2. SX1 抜き取り穴 (北より)



1. 礎石、凝灰岩（東より）



2. 礎石、花崗岩（北より）



1. 断割り状況（東より）



2. 断割り状況（北より）



1. 地業石積み状況（北西より）



2. 地業石積み状況（東より）



1. 南壁断面



2. 断割り断面



1. 北トレンチ全景 (北より)



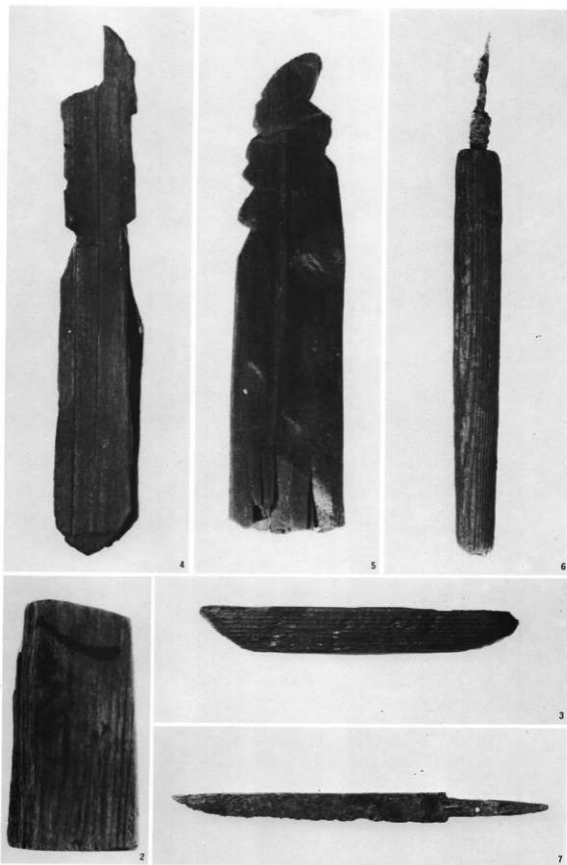
2. 西壁断面



1. 全景 (北より)



2. 汀線 (北東より)



人形(4・5) 錐(6) 将棋の駒(2) 舟形木製品(3) 刀(7)



9



10



13



15

軒丸瓦(9・10・13) 軒平瓦(15) 鬼瓦



17



18



20



21



22



24

軒丸瓦 (17・18・20・21・22・24)



瓦器(9・12・13) 青磁(14・15) 水滴(第60次出土)

鳥羽離宮跡調査概要

昭和55年度

発行日 昭和56年3月31日
発行 京都市埋蔵文化財調査センター
住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 441-5261
編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521
印刷 真 陽 社

